

Title	家永三郎・庄司吉之助共編 『自由民権思想』(中)
Sub Title	S. Ienaga & K. Shōji (ed.) : Thought of jiyū-minken (democratic movement in early Meiji era)
Author	向井, 健(Mukai, Ken)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1958
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.31, No.1 (1958. 1) ,p.76- 79
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19580115-0076

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

家永三郎 共編
庄司吉之助

『自由民権思想』(中)

近代社會運動の歴史がはじまつてこのかた、すでに年ひさしい。わが國においても、勞働者・農民を中心とする社會的な諸運動は、今日、數十年の歴史をつみあげてきている。しかし、このながい歴史の傳統を體系づけ、その貴重な教訓を集約して、現在に役立つような社會運動史の編纂や記述は、いまだ充分になされていない。いな、むしろ、そうした歴史記述に不可缺の數多の重要な原資料・文献の類すらが、まだ完全にまとめられず、かえつてますます散佚していく現状にある、といえよう。

そこで、細部におよぶ文献の蒐集・整序はひとまず將來のこととして、とりあえず、明治以降、今次大戰、ごろまでのわが社會運動史の研究と理解のために、是非とも必要とおもわれる基本的資料を系統的に整理し、刊行することが企畫され、現今それが漸次實現しつつあるのが、「資料日本社會運動思想史」である。本書「自由民権思想・中」は、この叢書の一冊として上梓されたものであり、さきに發刊された「自由民権思想・上」の續編をなす。

戦後、長足の進展をとげた明治史研究のなかでも、とりわけあざやかな新地圖をえがき、學界に注目の話題をなげかけたのは、自由民権運動に關する考究である。幾多の専門家によつてものせられた研究成果は、まことに枚擧にいとまがないほどであるが、全體を通觀して、とくに顯著な、すぐれた業績を指摘するとすれば——もちろん異論も多かるうが——、個人を對象としては植木枝盛の研究、地域的にまとまつたものとして福島地方の研究があげられるのではあるまいか。

本書に收められている資料は、家永三郎教授の編集・解説にかゝる「植木枝盛著作集」と庄司吉之助助教による「福島縣民権運動資料」であつて、期せずして、前者において、自由民権運動の立役者であり、その最高の理論家であつた植木の思想に觸れ、後者により、福島事件當時の態様の一端を窺知することができるわけである。以下、簡単に内容をしるして、責をふさぐことにしたい。

二

植木枝盛——その名は、ひさしく忘却のなかに葬られていた。それは、彼のががやかしい理論の全貌が、戦前にはとうてい世に紹介することのゆるされない時代的制約に原由していたのである。自由民権運動における重要な政治的指導者であり、その最高の理論家として、植木をあげることは誰しも異論はないであらう。枝盛の政治思想については、鈴木安藏教授の先驅的業績があり、たかく評價すべきであらうが、それをさらに敷衍して彼の思想を多角的・綜合的に考察し、全分野の大觀をこころみられたのが、家永教授であ

る。教授の論著「革命思想の先驅者——植木枝盛の人と思想——」(岩波書店刊)は、その成果であつた(拙稿「家永三郎著『革命思想の先』。爾來、植木研究はようやく活潑化し、明治史の專家の間に好個の研究テーマとなつてきた感すらある。本年(昭和三年)、外崎光廣氏の手により「植木枝盛家族制度論集」(高知市立市)が公けにされたことは、大きな收穫であつたが(拙稿「外崎光廣編『植木枝盛家族制度論集』」本誌第三〇卷八二九卷)、さらにこれを追うように、今般、家永教授により「植木枝盛著作集」が世におくられたことは、研究者にとつてかさなるよろこびとなければならない。植木生誕百年にあたる本年は、枝盛研究のために、みのり多き年でもあつた、といえるであらう。さて、彼の「著作集」として収録された論稿は左のごとくである。

- (一) 戦は天に對して大罪あること 雜へたり萬國統一の會所なるべからざること 稿本 明治五年
- (二) 自由は鮮血を以て買はざる可らざる論 「湖海新報」 明治九年 稿本 明治十年
- (三) 極論今政 世に良政府なる者なきの説 稿本 明治十年
- (四) 民權は憲法の奴隸に非ず 「高知新聞」 明治十四年
- (五) 國家主權論 「高知新聞」 明治十五年
- (六) 酒屋會議廣告文 「日本立憲政黨新聞」「朝野新聞」 明治十五年
- (七) 集會結社并に交通の自由を論ず 「自由新聞」 明治十五年
- (八) 兵の本意 稿本 明治十五年
- (九) 徵兵適齡懇親會 稿本 執筆年不明

紹介と批評

- (一) 國家及國民的の文字 「自由新聞」 明治二十三年 稿本 明治十一年
- (二) 尊人説 「高知新聞」 明治十五年
- (三) 無神論 「土陽新聞」 明治十四年
- (四) 鼠小僧の墓に詣りての演説 「土陽新聞」 明治十八年
- (五) 貧民論

(一)より(五)までは政治關係の論説、(六)は、人生觀・世界觀に關する論考、(四)(五)は、社會問題に關する論策、と三部にわかれたるであらう。彼の政治思想をただしくとらえるためには、さらにさかのぼつてその人生觀・世界觀にもおよぶ必要があり、それは、思想家としての植木のはばのひろさをしめすことにもなる。このうち、稿本を覆刻した(一)戦は天に對して大罪あること 雜へたり萬國統一の會所なるべからざること、(三)極論今政、(四)世に良政府なる者なきの説、(五)兵の本意、(九)徵兵適齡懇親會、(六)尊人説の六編は、今回はじめて活字にうつされたものである。

(七)の酒屋會議廣告文は、やや異色に屬するが、酒屋會議というのは、植木が、重税に苦しむ酒造業者を糾合し、政府に減税を迫るために開催したもので、種々興味ふかい問題をふくんでいる。その顛末は、家永教授の近業「植木枝盛と酒屋會議」(歴史評論)に詳細である。なお、採録された論稿の個々については、要をえた解説(八頁以下)があることゆゑ、それにゆずりたい。

この解説にひきつづき、「植木枝盛著作目録」が附收されている。五十頁にちかひ精到な目録であり、教授が多年にわたつて關係資料をくまなく涉獵された努力の見事な結實として、後學のひとりとして衷心より敬意と感謝を表したい。「研究者のこれより受ける利便

は、はかりしれないものがある。ただ、一・二氣付いた點をしるすと、「G 未刊の稿本」(二三三)に、「卑屈の目さまし」「租税ヲ出ス者参政權ナルベカラズ」の二編がふくまれており、いまだ活字にならないように説明を加えてあるが、それらは、かつて甘粕忠好氏が「明治大正史談」誌上において紹介されたことがある(同誌第六卷)。
また、「世益雜誌」に登載された「民權自由歌」についても、おなじく甘粕氏の資料紹介があるが(明治大正史、この歌と、「民權かぞへ歌」(昭和二年版・四六二頁参照))との關係はいかがなものであろうか。御示教たまわれば、幸いである。

本目錄によつて明らかのように、植木の著作は、單行本・新聞雜誌に發表した論說・未刊稿本・演說筆記などをあわせると、まことに莫大な量に達する。彼の傳記をよみ、その業績をひもとくことに三十六年の短い生涯によくこれだけの仕事をのこしたものと、彼の精力的な活動ぶりには、ただ嘆息をあげるのみである。

なお、家永教授は、「革命思想の先驅者」にひきつづき、植木枝盛詳傳の刊行を企畫中であるとき、その發刊の一日も早からんことを、この機會をかりて、切に希求いたしたい。

三

戦後、わが國の地方史研究は、質・量ともに、いちじるしい發展を示している。なかでも、福島地方の研究は、有能な指導者たちの研鑽により、地方史研究のピークをかたちづつていて、といえよう。自由民權運動に關しては、かの福島事件の周邊をめぐる數多くの考察があり、種々の分析視點より検討した諸成果は、するどくそ

の本質の解明にせまつてゐるが、とくに庄司助教の長年にわたる資料の探索と鋭利な洞察によるすぐれた研究の公表は、學界にたかくその價値をみとめられている。

世にいうところの福島事件とは、明治十五年二月、「某が職に在らん限りは火付け強盜と自由黨とは頭を擽げさせ申さず」と廣言しつつ福島縣に赴任した縣令三島通庸と、自由黨の有力者として、積年民權運動を推進してきた河野廣中との衝突事件である。

本書に集録された「福島縣民權運動資料——警察樞要書類——」は、明治十五年の一月より八月までの「政談演說中止」を中心としたものである。いまこれを列擧すれば、つぎのとおりである。

- 一 管下ノ景況
- 二 政談演說中止
 - (一) 外物ハ恃ムニ足ラザルヲ論ズ 琴田岩松
 - (二) 夜具ノ番ヲナシテ感アリ 安積三郎
 - (三) 泥棒ノ提燈持 琴田岩松
 - (四) 聽衆諸君ニ告グ 阿部又郎
 - (五) 恐ツカナイト想フカラ恐ツカナイゾ 示野潤
 - (六) 我國内閣責任鴻大ノ辯 原平藏
 - (七) 從道者興逆道者亡 柳沼龜吉
 - (八) 自由ノ辯 菅原太事
 - (九) 國家民君成立ノ原因 笠原忠節
 - (十) 愛國衷情之然ラシムル所乎 佐々木勝次
 - (十一) 公私 示野潤
 - (十二) 福島縣會之結果 原平藏

(一)	反働力ノ結果	琴田岩松
(二)	言論	示野 潤
(三)	縣 治 論	琴田岩松
(四)	立法者ノ注意	阿部 又郎
(五)	集會條例ノ改正	河野廣體
(六)	佛國革命古話	小笠原省三
(七)	迷惑論	井上平吉
(八)	我レハ人ナリ	琴田岩松
(九)	愛國ノ説	大河内英象
(十)	腕力論	柳沼龜吉
(十一)	誤認スル勿レ	關根常吉
(十二)	天下恐ルベキモノ我レ乎	岡野知莊
(十三)	コレヲ病豫防法	琴田岩松
(十四)	死シテ爲スベキノ事業	安積三郎
(十五)	不倒翁ニ政體轉變ノ理ヲ論フ	示野 潤
(十六)	嗚呼是レ誰ノ過ゾヤ	平島松尾
(十七)	我國ノ多事	井上平吉

三 官吏侮辱

(一)	巡查侮辱	鈴木重謙
(二)	官吏侮辱	須藤甚之助
(三)	官吏侮辱	金内委助

右に掲げた各種の演説内容は、國會開設論は勿論であるが、君主論と專制政治論が多くを占め、とくに君主論については激化した様相をふかめている。庄司助教の解説も、これら演説に現われた自

由黨員の君主論について述べられている。福島縣における民権運動の解明のうえに、興ふかい資料といふべきであろう。

四

以上、きわめて杜撰な概観をこころみただいである。いまさらいうまでもなく、散佚せる稀覯な原資料を蒐集し、整序し、かつそれを覆刻することは、至難の業である。それにもかかわらず、本書において、家永教授・庄司助教の兩氏は、ともに困難を克服して見事にこの仕事を達成され、さらに、ゆたかな學殖にもとづく解題を添えて、本巻を充實した一本としておられる。本書の發行により、將來の植木枝盛研究・福島自由民権運動史研究は一段のふかみを加え、新たな局面を展開することであろう。この書をひろく明治史の專家の机邊におすすめることを、筆者は大きなよろこびとする。摺筆にのぞみ、本書編集の任に當られた家永・庄司兩氏の犠牲的な努力に對し、ここにかさねて畏敬の念を表したい。(青木書店刊 文庫判 二九九頁 頒價一八〇圓)

(向井 健)